

相補的ハイブリッド性

—ロシア・ユダヤ人と自己を引き立てる他者—

東京大学 鶴見太郎

1 目的

異なる諸要素が自己のなかに共存するハイブリッド性については、状況に応じた自己の呈示の仕方や自己理解のあり方、ネットワークの形態、それが生み出す文化や社会変革など、いわばそれを与件としたうえでの諸現象について、様々な研究が蓄積されてきた。しかし、異なる諸要素が自己のなかでどのように連関しているのかについての考察はいまだ十分に深められていない。本報告では、「ハイフン付き民族」として歴史上様々なハイブリッドなあり方を展開してきたユダヤ人に関し、特にロシア帝国の崩壊期に同帝国と関わりを持っていたユダヤ人を事例としながら、ハイブリッド性がどのように維持され、また解消されることがあるのかについて理論的に考察していく。

2 方法

はじめに、諸要素が自己のなかで相互補完的に存立する相補的ハイブリッド性という概念について世界の諸事例に則しながら理論的に整理する。そのうえで、ロシア・ユダヤ人の事例を紐解いていく。ロシア・ユダヤ人はいくつかの言語で言論活動を行っていたが、ここではロシア語のユダヤ系定期刊行物に焦点を合わせる。なかでも、自由主義者と、自由主義系のシオニストの週刊誌（紙）やその界限で流通していた小冊子を分析し、ユダヤ人とロシアとの関係がいかに論じられていたかに着目する。

3 結果

帝国崩壊前まで、シオニストを含め、ロシア・ユダヤ人はロシアという枠組みを政治的な意味でも社会・文化的な意味でも前提としていたが、とりわけボリシェヴィキによるロシアの枠組み自体の転覆は、自由主義系の勢力に動揺をもたらした。自由主義ユダヤ人は、亡命先においてもロシアという枠組みにこだわりを見せた。ただし、これは帝政期からと同様に、エスニックな意味でのロシア人への同化を意味しない。むしろ、ロシアという場にユダヤ人として関わることを前提としていた。興味深いのは、西欧化の推進者としての役割や経済的役割が、「後進的ロシア」においてユダヤ人の特質を発揮できるものとして指摘されていたことである。つまり、まさにロシアにおいてこそ、ユダヤ人は最もユダヤ人らしくあることができるという想定が読み取れるのである。これに対して、シオニストは帝国崩壊後、ロシアの再建にはあまり関心を示さなくなり、ユダヤ人国家の設置を主軸に据えるようになっていった。その背景には、内戦期にそれまでの比でなく頻発したポグロムゆえのロシア人への不信感があった。また、すでにシオニズム開始時から、ロシアにおけるユダヤ人の経済的な不利益の増大が認識されつつあったことも、ロシアとの経済的つながりをメリットと考えない方向に向かわせた。

4 結論

帝国崩壊後のロシア・シオニストは、より軍事的な志向性を高めていく。このことは、彼らが単に暴力の文化に慣れたという単純な模倣の結果ではなく、暴力行使を抑止する可能性を持つハイブリッドな自己の展開の仕方が失われたことも影響しているのではないかということが示唆された。ハイブリッド性を維持するしくみについて、政治のみならず、経済的な認識を含め、総合的に検証していくことは、人々が共生するための条件を探るうえで鍵を握るだろう。

文献

鶴見太郎, 2017, 「ナショナリズムの国際化—ロシア帝国崩壊とシオニズムの転換」赤尾光春・向井直己編『ユダヤ人と自治—中東欧・ロシアにおけるディアスポラ共同体の興亡』岩波書店.